

# 地域教育調査への取り組み

——地域教育学科 2 年次必修科目「地域教育計画論」の 3 年——

大谷直史（生涯教育総合センター）

## I 講義の課題

地域教育計画論は 2006 年度まで講義形式で行われていた 2 年生の必修の授業であった。ここに地域教育の実践的な調査活動を組み込もうと、2007 年度から毎年数名の教員とともに、新しい方向性を打ち出した講義が始まった。地域教育の概念、あるいは範囲も定まらないなかで、何をどのように調査すればよいのか、手さぐりの試みだったので、受講者も混乱したことだろうと思う。ひとまず 3 年が過ぎ、調査箇所も 73 カ所となった。これまでの具体的な成果は年度ごとに報告書にまとめているが、今後の方向性を考えるためにも、これまでの成果を概観することから始め、地域教育調査の到達点を記しておきたい。

それにしても「地域教育」は難しい課題である。生涯学習社会と言われ、あらゆる局面で学習が見出されるなかで、組織的に（定型的に）行われているものはごく一部である。多くの学習は未組織のまま、あるいは未分化なままである（それを学習と呼ぶのかどうかも議論がある）。教育と言えは学校教育か社会教育という組織的教育しか、ほとんどはイメージできないなかで、地域教育をどこに探ればよいのだろうか。

現在、あたかも教育の主体がそこにいるかのよう、「地域の教育力」であるとか「家庭の教育力」などという言い方がなされる。単なるスローガンだと言ってしまうればそれまでであるが、そうだとでもそこに期待されている何かがあるわけである。そしてそれは、そんなものは存在していなかったにも関わらず、多分に「失われてしまった」という感覚に囚われている。

失われてしまったとすればそれは、教育と類似した機能を持つものだったのであろうが、今ではそれが教育として機能し始めている。いずれにせよ、いま新たに（再び）教育と類似した機能を発揮しようとするならば、その根拠を問わざるを得ない。

だから「地域教育学科」だからという消極的な理由ばかりでなく、萌芽的な形態の教育をすくい取る試み、ひいては地域教育学を構築していく試みとして調査に取り組んできた。もちろん 2 年次の必修科目である本講義では、そこまでの課題を学生が意識して追求するわけではない。遠い目標としてはそのように定めながらも、まずはこれまでの個人的体験では得ることのできなかった地域・階層・空間に飛び込み、幅広い体験をすることを最

低限の目標とした。調査においては可能な限りボランティア体験をさせてもらったり、見学したりすることを勧めたのもこのためである。

通常わたしたちは（学生は）、自分に深く切り込んでくると、極端に言えば自分に対してしか興味を持つことはない。むろん客観的には深く切り込んできても主観的に認識されていなければ興味の持ちようはなく、認識していることしか経験はできない。しかし認識からはみ出て経験されることがあり、それが認識の強化にとどまらない体験としてわたしたちを揺るがすことになる。この体験を教育的に「なぜ」という問いとしてとらえ返すことで、ようやく調査仮説を設定することができる。

ところがこの体験にしても、ただボランティアをすれば得ることができるような、そう簡単なものではないし、教育的な問い方というものも学ぶ必要がある。「調査で知りたいことを考えてください」という問いかけをすれば、返ってくるのは「どうなっているのか」「どうしているのか」という形式の問いばかりである。それはこれまで学生が行ってきた学びが、どこかにある正解に向けて「どうなっているのか」を問う学びであり、「なぜ」を問うものではなかったからである。

教育的にでなければ、「なぜ」という問いはそこかしこに見ることができる。「なぜ彼はわたしにうそをついたのか」「なぜこの踏切はこんなに長く待たせるのか」「なぜぼくは生きているのか」等々。多くの場合わたしたちは普通の状態を予期していて、それが裏切られたとき、「なぜ」という問いを発する。

だから教育的に「なぜ」を問うためには、教育的なある信念——それは純粋に理論的であってもよい——を持っている必要がある。その信念が裏切られたとき、あるいは理論通りにことが運ばないときに、教育的な「なぜ」という問いを発することができる。しかし信念と言えほどのものを学生が持っているとは限らない。というかほとんど持っていない。だから捏造するしかない。捏造という言い方が悪ければ、仮に設定するということであり、それがつまり調査における仮説となる。

以上のように、体験から仮説、仮説から調査、調査における体験という具合に循環する過程を目指したのであるが、どこまでそれを達成することができたのかを検討したい。

## II 講義の流れ

まずは全体の流れを確認するために、2009年度のシラバスを表1に掲載する。

表1 地域教育計画論シラバス概要

回	内容
1	ガイダンス、地域教育とは何か
2	調査にあたって1～視野を広げる（ビデオ視聴と討論）～
3	調査にあたって1～教育統計を読む～
4	調査にあたって2～批判的に考える～
5	調査にあたって3～子どもの放課後をめぐる論点提示～
6	グループ作業（調査対象選定・資料収集）
7	グループ作業（調査内容検討）
8	第1次発表
9	グループ作業（調査内容検討）
10	調査実施
11	調査実施
12	グループ作業（まとめ）
13	グループ作業（まとめ）
14	最終発表
15	討論会

この講義は必修のため、2年次の50数名と過年度生等を加えて60名弱で行われている。毎年5回程度で、調査の対象となる地域教育の概念について、ビデオ視聴や各種統計資料を用いて、グループ討議を交えながら講義する。このうち1時間は調査方法に関する説明を行っている。

グループの作り方には、毎年過剰な趣向を凝らしている。2007年度は興味のある調査対象によって振り分けたのであるが、2008年度、2009年度は事前に行ったアンケートによって考え方の近い者どうしをグループにし、それから調査対象を話し合っ決定してもらった。

アンケートは次項の通りで、5件法による回答から因子分析・クラスター分析を用いてグループ分けを行った。ちなみに教育でイメージする色は毎年聞いており、2009年度は、白(20%)、オレンジ・青(15%)、黄・赤(11%)、緑(9%)とバラエティに富んでいた(2007年度は青35%、白18%)。また動物の方は、イヌ(18%)、鳥(13%)、サル(11%)、ライオン(9%)となぜか桃太郎状態(どうでもよいことだが)であった。なおこの年のグループ分けは結果的に、図1の岡田の類型に沿った形で分けられた。

グループの人数は4～6名で、全部で10～12程度のグループができる。統計や資料を読み込むのも同じグループで行い、調査対象が決まってからは担当教員をつけることになる。毎年3～5名の教員に専門が近いと思われる2～3グループの指導を依頼した。指導は各教員にゆだねたが、基本的には調査仮説の設定をお願いしている。

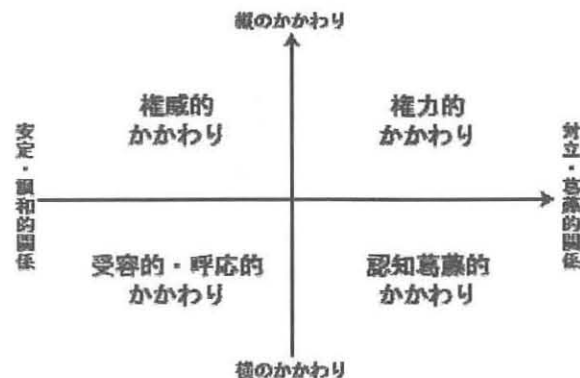
表2 グループ化用質問紙

1)「教育」に関する考え方について、それぞれ当てはまる番号に○をつけてください。

	そう 思う	やや そう 思う	どちら とも言 えない	あまり そう思 わない	そう 思わ ない
1.英語はなるべく早くから学ぶのがよい	5	4	3	2	1
2.手を出さずに見守ることが大切だ	5	4	3	2	1
3.教育は平等な社会の実現に役立つ	5	4	3	2	1
4.生きる力の低下が心配である	5	4	3	2	1
5.教育には本音でぶつかり合うことが必要だ	5	4	3	2	1
6.総合的な学習の時間は必要ない	5	4	3	2	1
7.学力テストの結果は学校別に開示するべきだ	5	4	3	2	1
8.文字よりも映像の方が教育効果は高い	5	4	3	2	1
9.茶髪で中学校に登校してもかまわない	5	4	3	2	1
10.従軍慰安婦問題を教科書に掲載すべきだ	5	4	3	2	1
11.行きたくなければ学校(小・中)に行かなくてよい	5	4	3	2	1
12.学校の先生は人格的にも高潔であるべきだ	5	4	3	2	1
13.美術館・博物館の入館料は無料にすべきだ	5	4	3	2	1
14.服装の乱れは心の乱れである	5	4	3	2	1
15.テレビゲームは脳に悪い影響を与える	5	4	3	2	1
16.学力が家庭環境に左右されるようになってきている	5	4	3	2	1
17.教員免許更新制は廃止すべきだ	5	4	3	2	1
18.トイレの落書きは犯人を捜すことが教育の第一歩	5	4	3	2	1

2)「教育」を色で表わすとすれば何色をイメージしますか。1つだけ答えてください。 \_\_\_\_\_ 色

3)「教育」を動物で表わすとすれば何をイメージしますか。1つだけ答えてください。 \_\_\_\_\_



岡田啓司『かかわりの教育学』ミネルヴァ書房、1993年、p.4  
図1 教育的かかわりの4類型

表3 調査対象一覧

2007年度 32カ所 テーマ「教育と福祉」	2008年度 24カ所 テーマ「地域教育計画」	2009年度 17カ所 テーマ「子どもの放課後・休日」
保育所ちびっこランドこやま園 かる美咲園 若草学園 ひかり幼稚園 湖山保育園 白兎保育園 矢谷学園鳥取第5幼稚園 湖山小学校 湖山西小学校 賀露小学校	保育所ちびっこランドこやま園	鳥取商業高等学校吹奏楽部 鳥取商業高等学校硬式野球部
風の子児童クラブ デイサービスオレンジ デイサービスみんなの家 障害者福祉センター厚和寮 地域でくらす会いくのさん家 さくらんぼ	ぼっかぼか児童クラブ いちばん星 とっとり若者仕事プラザ 児童クラブ「さくらのみち」 ルピナス ともの家 地域でくらす会いくのさん家 さくらんぼ	なかよしクラブ わかあゆ児童クラブ 風の子児童クラブ みほっこ児童クラブ ぼっかぼか児童クラブ 明治小学校放課後子ども教室
公文式湖山北教室 明光義塾鳥大前教室 伝習館湖山本部教室 ベンチマーク 光徳書道教室 森絵画研究所 とっとり出会いの森 布勢総合運動公園	湖山西地区公民館 湖山地区公民館 末恒地区公民館 賀露地区公民館 わらべ館 県立図書館 市立中央図書館 鳥取産業体育館 鳥取市公園・スポーツ施設協会 布勢総合運動公園 布勢総合運動体育館 船上山少年自然の家 湖山公園	賀露地区公民館 湖山西地区公民館
グリーンスポーツとっとり とっとり賀露かっこ館 子どもセンターぼちぼち		鳥取おやこ劇場 みんなの居場所ぼっと 鳥取版びつくりひょうたん島実行委員会 ボレボレキッズ☆
ローソンL鳥取大前店 ローソン美萩野団地入口店 ポプラ鳥大附属前店 ポプラ湖山南店 ファミリーマート湖山西店	鳥取銀行湖山支店 山陰合同銀行湖山支店 鳥取信用金庫湖山中央支店	アミバラ鳥取北店 マクドナルド鳥取店 みどりショップ(駄菓子屋)

### Ⅲ 調査対象とその変遷

次に各年度の調査対象とその特徴を表3に記しておく。同一の施設を対象としていることもあるが、年度ごとのテーマ設定により変化していることの方が多い。見やすさのため類似する施設をまとめてあるが、その対象の広さから厳密な区分はできない。

調査は約5名のグループ単位で行い、必ず複数の対象を持つように定めた。これは比較することが仮説の設定を容易にしてくれるからである。また類似する施設を対

象とする場合には、グループ間で共通の質問を設定するようにした。

2007年度のテーマは教育と福祉であり、なおかつ湖山地区を主な対象として取り上げるよう指導した。このためいわゆる教育施設と福祉施設が多くなっている。2008年度は鳥取県の教育計画の検討を行ったため、社会教育施設が多く、2009年度は「子どもの放課後・休日」をテーマとしたため、学童保育所が多くなっている。

毎年度、およそ教育機関とは呼べないような施設が並んでいるのが分かる(表の一番下)。たとえば、コンビニ

エンストアや銀行，ゲームセンターなどである。これらの施設はもちろん教育を第一義的な目的としているわけではない。しかし最初に述べたような教育の萌芽を，時には安易な教育の解釈（看板で注意しているから教育している等）に引っ掛かりながら，捉えようとしていた。

調査は必ずしも順調に進んだわけではない。まず調査時期がどうしても年末年始になってしまうことが，調査対象に断られる理由の一つになっている。動機付けを行い，調査方法を学び，調査対象のことを調べていると，調査時期は自ずと決められてしまう。たとえば学童保育所では，クリスマス会などのイベント時期と重なり，少々無理を言わねばならなかった。またグループのメンバーの揃う時間と調査の時間の調整が困難であるなど，時間的な問題があったように思われる。

内容面でも，地域教育の調査，あるいは2007年度は教育施設の福祉的機能の調査という名目が対象者に伝わりにくく，調査を断られることがあった。こういった，地域調査ではよくある困難は，自分自身を問い返す契機であり，調査実習の一環としてとらえたい。



#### IV 各年度の特徴

##### 1. 2007年度

調査を始めた初年度である2007年度は，当時地域教育学科全教員が進めていた科学研究費のプロジェクト「地域の教育福祉諸機関の連携に関する総合的研究—新しい専門性の形成をめざして—」（平成17年度科学研究費・基盤研究（B）課題番号17330167 研究代表者：田丸敏高）の成果から，湖山地区の教育福祉諸機関を調査対象とした。教育福祉問題はかつて，教育と福祉，両方からこぼれおちる層——障害児・貧困等——に関わる諸問題を解決するために提起された。その教育福祉問題は，現代日本において偏在し，あ

らゆる層が教育福祉問題を抱えているというのがそこでの提起の一つであった。

少々無理やりではあるが，調査対象となった各施設について，教育と福祉の割合を考えるように指示した。図2は湖山地区の教育的機能と福祉的機能を探するという課題で2講目に歩いた探したポイントである。黒いマークが教育的機能，白色が福祉的機能，灰色が両方の機能を示している（地図の作成にはGoogleのマイマップ機能を用いた）。図は最終的に作成された各調査対象の教育的機能・福祉的機能それぞれの割合を地図上に示したものである。教育と福祉の捉え方にもよるのであるが，教育施設に福祉が，また福祉施設に教育がないわけではなく，混在した状況であると学生が考えていることが分かる。

実際に教育機関である小学校の給食は福祉的な機能を果たしているであろうし，集団を形成するためには不可避免的に多様な人間関係を営むことになり，それが子どもにとって福祉的な意味合いを持っていることは明らかである。一方福祉機関にとっても，利用者は福祉を享受するだけではなく，自立自助が称揚，あるいは主体的な利用が促進されるとすれば，そこには利用者への教育が伴わざるを得ない。

とはいえ，必ずしも意識的に追及されていない教育や福祉を捉えることは難しい課題であったと思われる。バリアフリーだから福祉的であるとか，食事のマナーを教えているから教育的であるなど，安易な解釈が行われてしまいがちであった。

しかし教育と福祉の両面から考えることで，たとえばスポーツを促進することが，健康維持という福祉目的だから福祉と考えてよいのか，それとも教育が行われていると見ればよいのかを問うような考察もあった。教育の本質とは何かを問う作業は多くのグループで行われており，安易な解決に導かない指導が必要である。

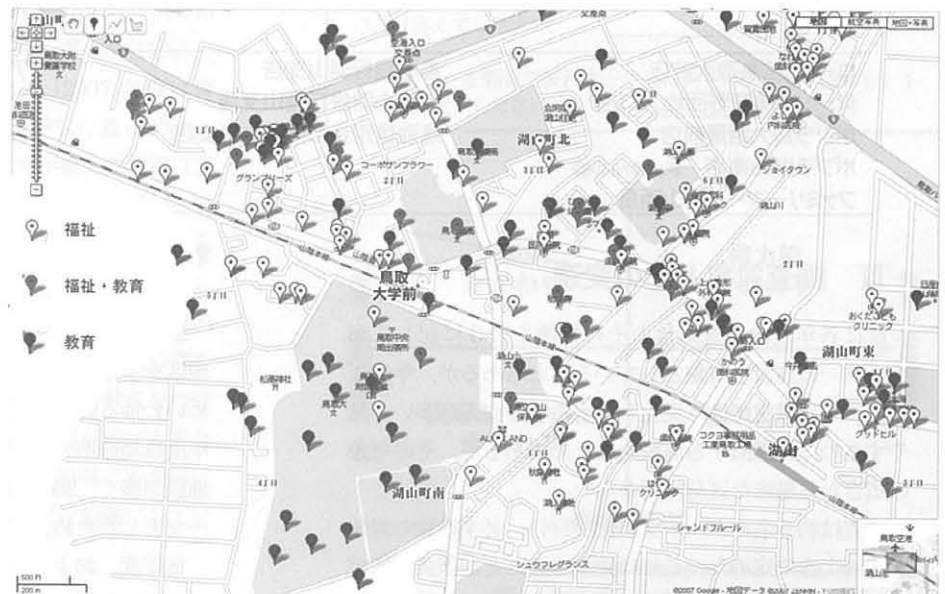


図2 湖山地区の教育的機能と福祉的機能

湖山・美穂野・賀茂地区  
教育・福祉マップ

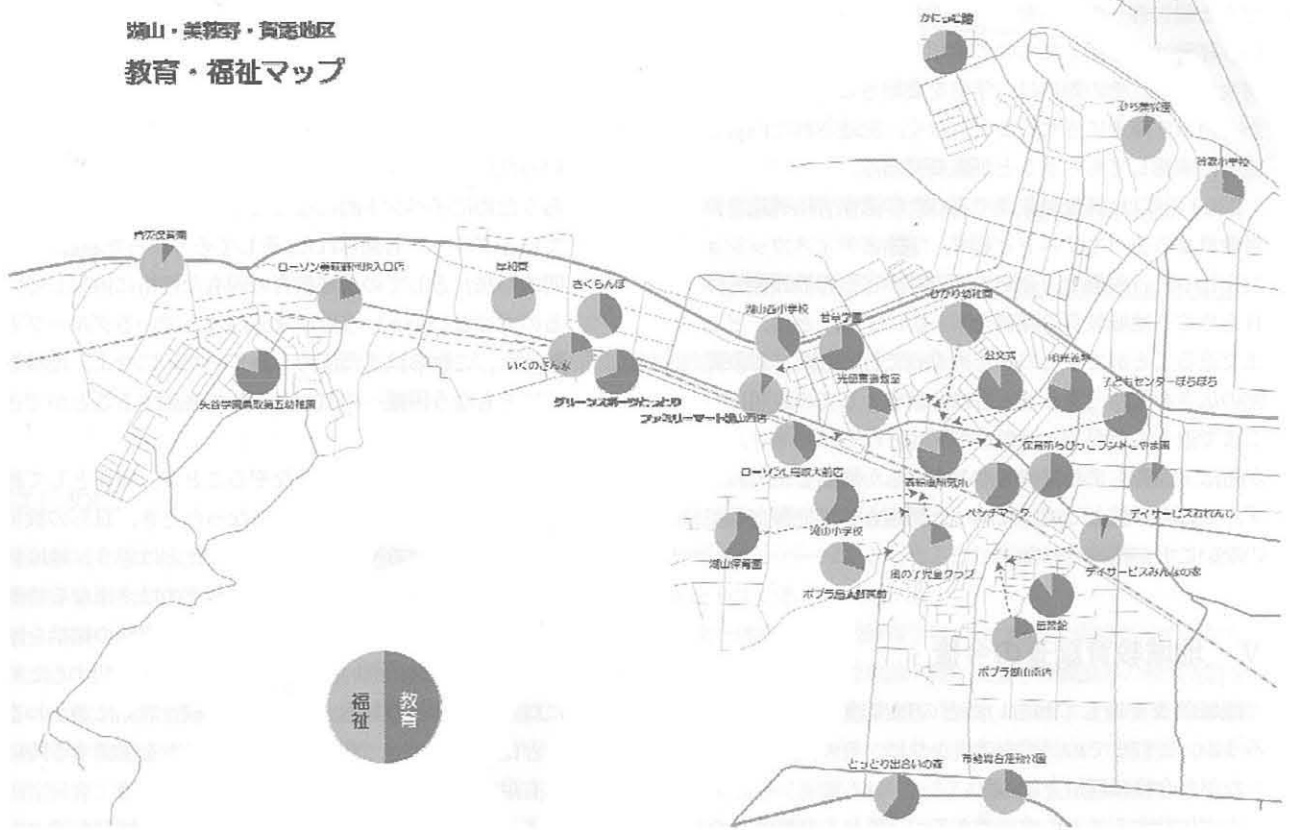


図3 教育・福祉マップ

2. 2008年度

2008年度は計画論の名にふさわしくしようと、鳥取県教育委員会の教育計画(『鳥取県教育委員会ミッションに基づく平成20年度事業目標』『平成19年度教育行政の点検及び評価』)を検討し、そこでの評価の確認、不足している評価の視点と内容を調査することを課題とした。

また昨年同様、グループごとに湖山地区を歩き、地域社会における教育的な要素を探し出すこととした。それとともに、「教育」の概念を拡張するために、いくつかのVTRを用意した。VTRは「ドキュメント につぼんの現場」(NHK放送センター)から「旅する折り紙」「千客万来まちの“不夜城”～鹿児島・巨大スーパー」(いずれも2008年放送)を準備した。これらの学習を踏まえて、教育行政の点検と評価の妥当性や評価の根拠について検討を行った。とりわけ地域教育の視点から、そもそも評価項目に掲載されていない事項、評価の際に考慮されていない事項がないかどうか注意するよう促した。

調査実施にあたっては、調査対象に関する基本的な事項(対象者、運営、法的根拠等)を整理するとともに、他のグループの調査対象にも関心を持ってもらうことを目的として中間発表を行った。これは昨年度の調査において、対象施設の目的や法的根拠を知らずに調査していたり、他のグループが調査している施設のことも何もしらないという状況を改善するためであった。

3. 2009年度

2009年度はテーマを子どもの放課後と設定した。教員や保育士志望の学生にとって、地域教育に目を向けるためには手ごころなテーマ設定と思われたからである。

例年のスケジュールに加えて、最終発表を行った次の時間(最終回)に、ゲスト(学童保育指導員)を招いて討論会を企画した。これまでも調査対象者には発表会のお知らせや報告書の配布を行ってきっていたが、平日の午前中の講義のためフィードバックはほとんどできていなかった。

学生にとって、調査を行い、何らかの評価を記述することは、勇気のいることである。仮説を検証するための手続きに関する十分な知識があれば、用いた手続きに見合った限定的な評価を行えばよいのであるが、その知識を欠くために見聞きした事実をしか書くことができないか、逆に無理に一般化してしまうことが常である(各年度の報告書を見れば分かる)。それに加え、他者を評価



することに慣れていないということも、記述することをためらわせる要因となっている。こういった葛藤を経てきた報告書への反応を、直接調査対象者から受けるという経験は、記述したものの承認を得るためにも必要不可欠である。その際には、学生を委縮させることなく、かといって尊大にさせることもなく、記述された内容を正当に承認してもらうことが重要である。

2009年度は、調査対象者であった学童保育指導員と担当教員2名をパネリストとして、学生とディスカッションを行った。討議は、今回の調査が子どもの放課後・休日をめぐる地域教育の課題を明らかにすることに、どこまで迫ることができたのかをめぐって行われた。対象範囲の広さを問題とするとともに、教育としての課題にどこまで迫ることができたのか問題となる。パネリストからは、調査もまた実践も点としてしか展開しえておらず、それらが線としてつながった問題として把握されていないことが指摘された。

## V 地域教育調査の今後

地域調査を通してねらいはどの程度達成できたのだろうか。これまでの記述を手掛かりに、その成果を確認しながら今後の展望を記したい。

まず体験することの成否であるが、それを判断するための材料はないため、断片的に推測するしかない。少なくとも調査という第3者的な立場をもって現場に赴くこと自体、多くの者にとって初めての経験であろう。公民館やゲームセンターは利用したことがあるだろうが、観察者という立場で利用したことはない。地域を歩く時も「教育」を意識して歩くことはないであろう。また全く初めて利用した施設や知ることもない施設に行くこともあったようである。教育実践の豊かさにふれ、圧倒されたという感想を持つ学生もいる。しかしそれが本当に体験足り得たのか、さらに教育的な問いを惹起するものとして体験されたのかはここでは判断できない。教育の概念をつかむためには2年次後期までの講義の中で何が学ばれているのかを知る必要があり、その学びを前提としたテーマ選定や調査対象選定の必要がある。

地域教育の2年次後期において、「教育」はともかく、「地域教育」の概念がつかみ取られているという印象はない。そのため、学校で行うことが教育であるという既成概念を崩す必要があり、論理として教育を把握することの必要性は提起できたと思う。しかし地域教育として実践されている調査対象が都合よくあるわけではない。だから地域教育を実感することができたとは考えにくく、まだ見ぬものにまでイメージをふくらませ、宙づりになったままにおかれているケースが多いだろう。

ゆえにそこで生まれる問いも、まだ教育的な「なぜ」

という問いには結びついていない。仮説の設定も、「〇〇は教育的役割を果たしている」という類のものが多く、施設や組織の課題がそのまま調査課題となっているケースが多い。対象に寄り添いすぎるのは、調査者としてのポジションを取り損ねていることになる。しかしながら、伝えたいことがあるのだが安全性を考えるとできないといった葛藤、伝えたいことがあるのだが興味を持ってもらうためにイベント的になってしまうという葛藤を捉えているグループも見られた。そしてそういった葛藤が「中間的存在」としての地域教育の固有な性格に由来しているのではないかという点に考えが及んでいるグループもあった。これらはまだ深められていないにせよ、地域教育にともなう困難への気づきとして確認することができる。

少なくとも調査の形式をなぞることで、職業として教育や保育・福祉に関わるようになったとき、自らの教育実践を相対化するやり方を身に付けたと思う。地域教育計画論で地域教育調査に取り組んだのは、単なる時間上の都合と言うわけではない。計画とは実践の総括を踏まなければ絵に描いた餅であり、実践を総括するためには調査が必要である。これは地域教育計画にかかわることばかりでなく、自分自身の教育計画を展望する時にも有用な手法だろう。

最後に、羅列的であるが、今後の課題と展望を述べておきたい。今後地域教育調査を地域教育計画論としてではなく通年化して実施することができれば、時間的な余裕や時期的問題を解決される。また、ただ経験するだけにとどまっていたり、おぼろげながら問題意識が生じてきたという状況にとどまっていたりする多くの受講者が、もう一歩進むための時間的余裕も持てるだろう。

具体的には前期には経験することを、後期には調査を配置してもよい。また地域教育学科の学生の多くが教員や保育士を目指すのであれば、学校や幼稚園といった定型的教育の経験を踏まえたうえで、地域教育の現場を経験し、比較することも試みられてよい。

教育・地域教育といった概念を現実を確認してみる機会とすることをもっと意識してもよく、1・2年次の他の講義（「地域教育入門」等）との連携が図られるべきだろう。これはこの講義にかかわらず、地域教育学科のカリキュラムを見通して検討されるべき課題である。

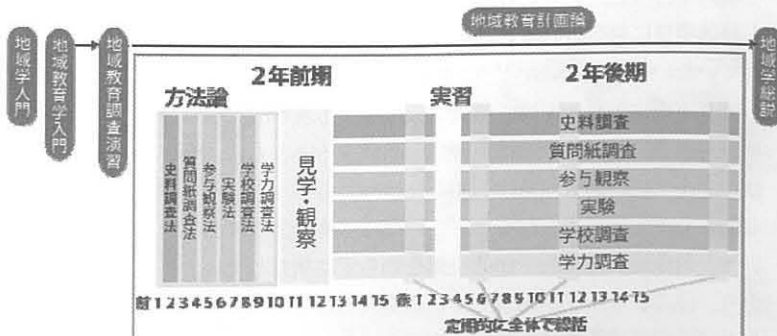


図4 地域教育調査演習試案